

埋蔵文化財調査センター ニュースレター

特集 刻書土器

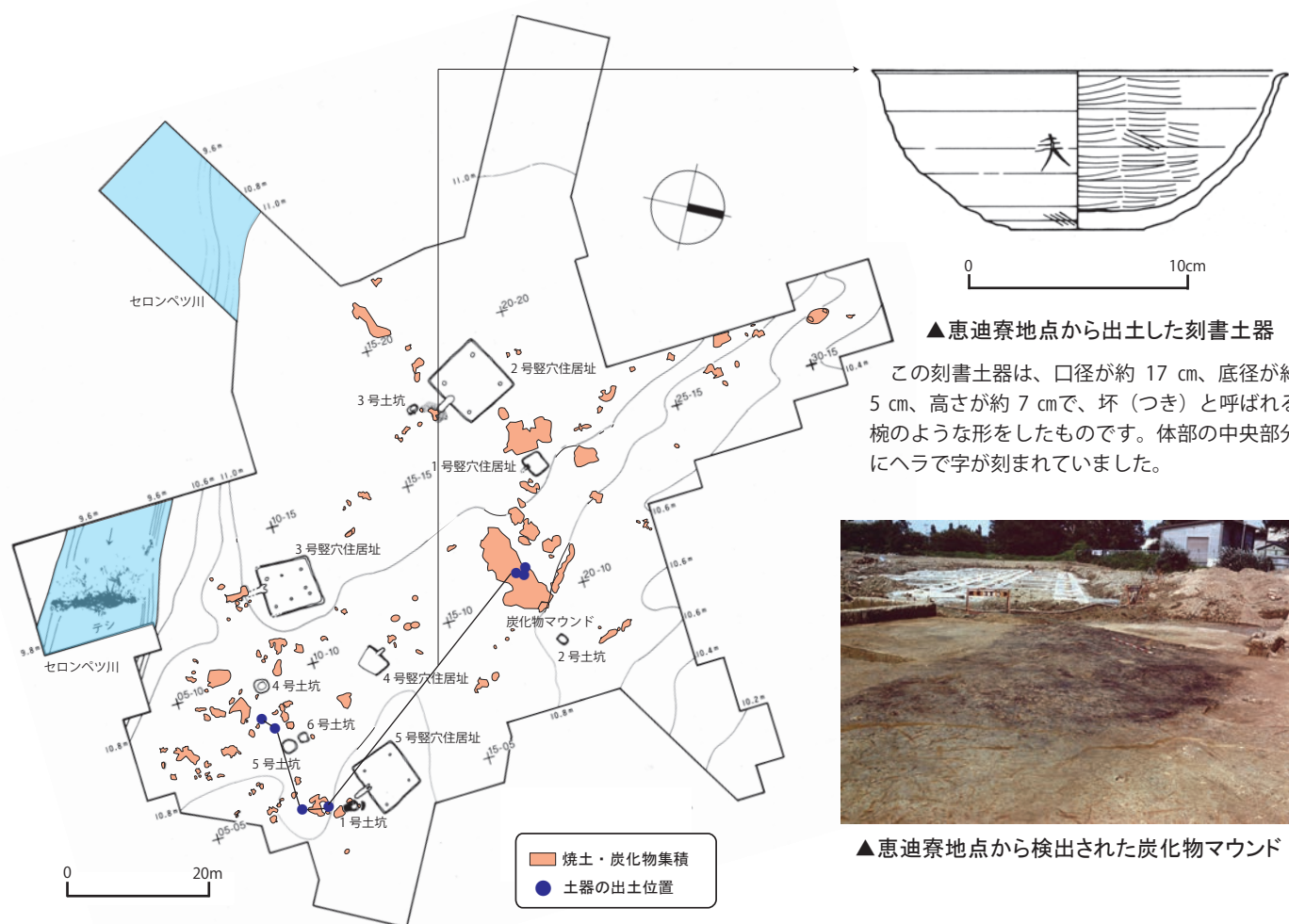
北海道大学構内の北西部に位置する恵迪寮の建設予定地で1981年から1982年にかけて実施された発掘調査では、擦文文化中期に残された集落址が発見され、この時期の遺物や遺構が数多く検出されてきました。そのなかに珍しい土器の出土があり、多くの注目が集められることになりました。それは焼成前の土器の外面にヘラによって「夫」という文字が刻まれていたものです。字が刻まれた土器が北海道内の遺跡から発見されたことは大変珍しく、この資料の発見については新聞（朝日新聞1982年12月3日付記事）でも大きく取り上げられ、全国的に知られるところとなりました。この土器は、9世紀後半のものと推定されています。

この土器に刻まれていた「夫」という文字には、どのような意味があったのでしょうか。この文字が刻まれた土器は、どこで、どのような目的で作られたものなのでしょうか。恵迪寮地点における刻書土器の発見を契機として、古代史を研究する歴史学者の間で論争が始まりました。



▲恵迪寮地点から発見された土器の外面に刻まれている「夫」の文字（右下は推定される筆順と方向）

恵迪寮地点と刻書土器の出土状況



▲恵迪寮地点における遺構と刻書土器の出土位置

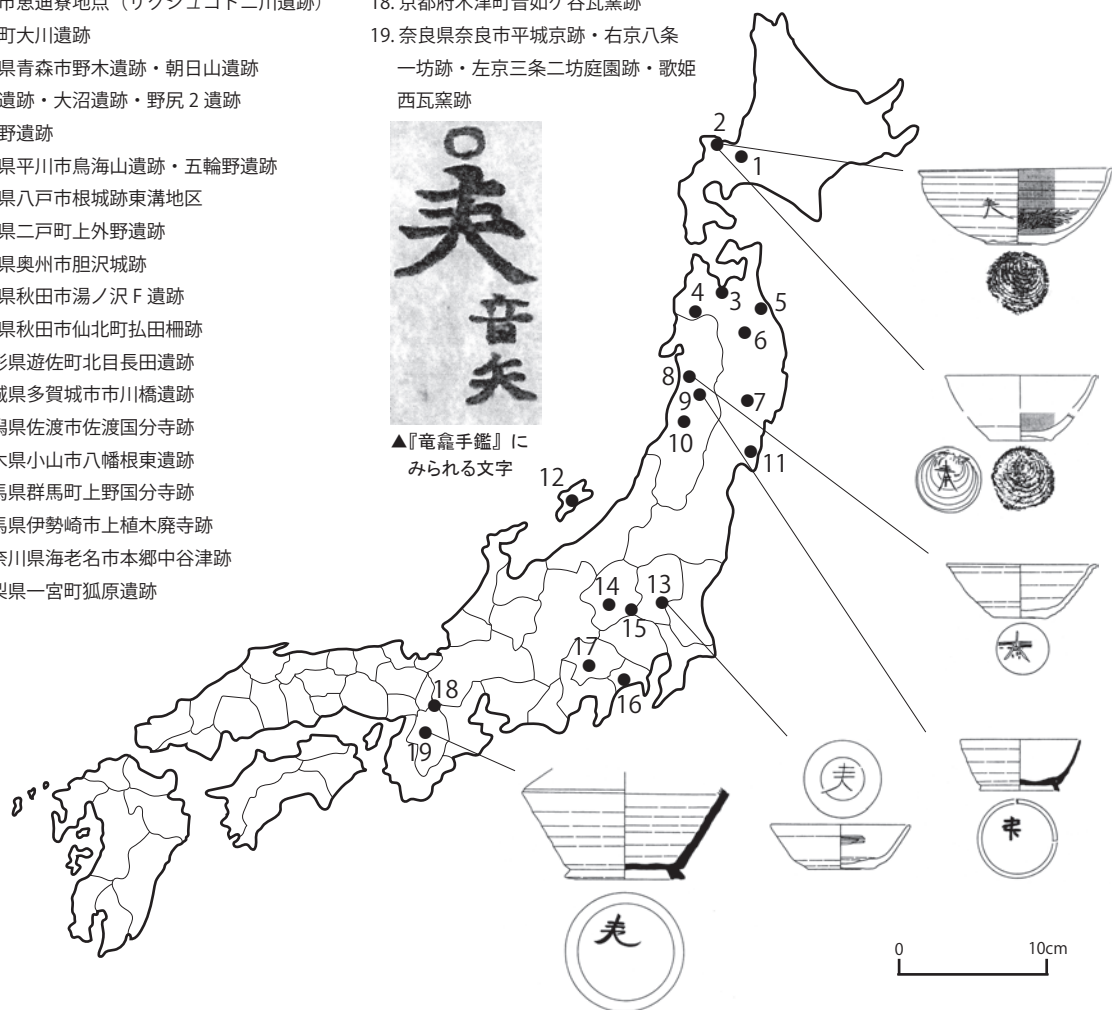
K39 遺跡恵迪寮地点（サクシュコトニ川遺跡）は、サクシュコトニ川とセロンペツ川が合流する地点の南西側にひろがる擦文文化の集落址です。刻書土器は、恵迪寮地点の第2文化層より出土してきました。この文化層からは、擦文文化中期の竪穴住居址5基や土坑6基、炭化物マウンドを含む多数の焼土・炭化物集積などが確認されています。また、50 個体の須恵器をはじめ、環状鉄製品や刀子、そしてコメなど、擦文文化の時期に本州からもたらされたと考えられる遺物も多数出土していることが注目されます。刻書土器は、いくつかの破片に分かれて、遺跡内の別々の場所から発見されています。そうした破片は、上の図にみるように、5号竪穴住居址の南・南西側の区域および炭化物マウンドからまとまって発見されています。炭化物マウンドは、多量の土器や炭化種子が残されていた遺構であり、廃棄場であった可能性も考えられます。

「夫」の字の意味とは？

1. 札幌市恵迪寮地点（サクシュコトニ川遺跡）
2. 余市町大川遺跡
3. 青森県青森市野木遺跡・朝日山遺跡
上野遺跡・大沼遺跡・野尻2遺跡
・近野遺跡
4. 青森県平川市鳥海山遺跡・五輪野遺跡
5. 青森県八戸市根城跡東溝地区
6. 岩手県二戸町上外野遺跡
7. 岩手県奥州市胆沢城跡
8. 秋田県秋田市湯ノ沢F遺跡
9. 秋田県秋田市仙北町払田柵跡
10. 山形県遊佐町北目長田遺跡
11. 宮城県多賀城市市川橋遺跡
12. 新潟県佐渡市佐渡国分寺跡
13. 栃木県小山市八幡根東遺跡
14. 群馬県群馬町上野国分寺跡
15. 群馬県伊勢崎市内植木廃寺跡
16. 神奈川県海老名市本郷中谷津跡
17. 山梨県一宮町狐原遺跡
18. 京都府木津町音如ヶ谷瓦窯跡
19. 奈良県奈良市平城京跡・右京八条
一坊跡・左京三条二坊庭園跡・歌姫
西瓦窯跡



▲『龍龕手鑑』にみられる文字



▲「夫」字をもつ刻書土器・墨書土器※1が発見された遺跡の分布（佐伯 2003 を改変）

恵迪寮地点で発見された刻書土器にみられる「夫」の字について、発見の当初から文献史学者の佐伯有清氏は、隋唐時代の李靖の書蹟に蝦夷の「夷」の字を「夫」とした例があることをふまえ、「夷」の異体字とする説を主張していました（佐伯 1986・2003）。8世紀から9世紀にかけて、北海道の「蝦夷」とみられる「渡嶋蝦夷」が、出羽国の秋田城などに「来朝貢献」した（『続日本紀』『三代実録』など）際に、饗宴の場で使用された食器のなかに「夫」の字が書かれた坏があり、それが持ち帰られたとする見解です。「夫」の字がへう書きされた土器の種類に坏が多く、同じような資料が東北地北部の遺跡から多く発見されていることも、この見解を裏づけるものとされています（小口 1993）。

しかしその後、古代日本刻書土器・墨書土器の本質は、器に盛った食物を神に供献する（奉る）際に文字を書くことであり、「奉」という文字には「本」「夫」「奉」など様々な略字体がある点をふまえ、「夫」も「奉」の略字であるとする説が平川南氏（2000）によって主張されました。「奉」であれば宗教的な供献に用いられた土器と考えることができるため、出土した遺跡の性格を考える際にも重要な意味をもつことになります。近年では、仏典の難読字を解説した『龍龕手鑑』雑事部にみられる文字（上図参照）との関連から、仏典のひろがりに伴って使用されるようになった異形の文字である可能性も指摘されています（三上 2016）。青森県の「夫」の字の墨書土器が出土している遺跡では、密教系の遺物が伴って発見されており、蝦夷社会での仏教的要素の受容との関係についても注目する必要があります（武井 2017）。

小口雅史 1993 「『夫』字窠（墨）書について」『海峡をつなぐ日本史』三省堂

佐伯有清 1986 「刻字土器『夫』の意義」『サクシュコトニ川遺跡』北海道大学

佐伯有清 2003 「北大構内サクシュコトニ川遺跡出土の『夫』字土器研究とその後」『北海道大学総合博物館研究報告』1

武井紀子 2017 「北奥地域における出土文字資料と蝦夷」『古代国家と北方世界』同成社

平川 南 2000 『墨書土器の研究』吉川弘文館

三上喜孝 2016 「文字がつなぐ古代東アジアの宗教と呪術」『古代東アジアと文字文化』同成社

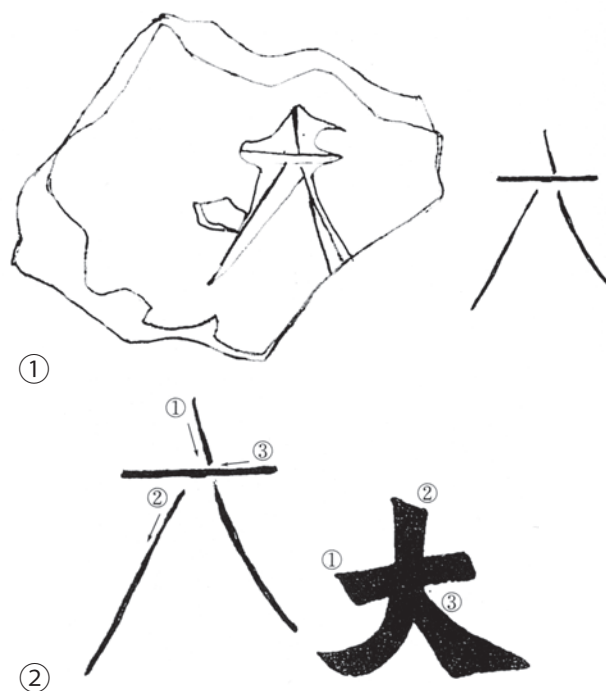
※1 墨で文字が書かれている土器。1つの土器には1～2文字しか記されていないことが多い。全国各地の古代遺跡から発見されている。

■ 刻書土器の筆順

日本列島で文字が書かれている土器の種類は、大きく墨書土器と刻書土器に分かれます。刻書土器は、土器の表面を刻んで文字を書いたもので、焼成前に字が刻まれているものをヘラ書き土器、焼成後に字が刻まれているものを線刻土器と区別されます。

刻書土器の文字には刻みの切り合いから筆順がわかる場合があります。長野県下高井郡木島平村根塚遺跡では、「大」の文字が刻まれた弥生後期の土器が発見されていますが、当時の中国で一般的にみられていた「大」の字形や筆順とは異なります。同様の字形と筆順の「大」の字がみられる刻書土器は、6世紀の韓半島の遺跡からも確認されています。

両者は、銅鏡に記されていた文字の形態をそのまま模して記してしまったケースではないかと推定されています（平川南 2000『墨書土器の研究』）。筆順を観察することから、東アジアの各地で文字文化がどのように受容されたのかを知ることができるというわけです。



▲ ①根塚遺跡出土刻書土器模式図（実物大）、②「大」の筆順比較（左：根塚遺跡出土土器の筆順、右：「大」の通常の筆順）（平川南『墨書土器の研究』より）

■ 第11回調査成果報告会の開催（報告）

第11回北海道大学埋蔵文化財調査センター調査成果報告会が2019年3月9日に学术交流会館において開催されました。今年度の調査成果の報告に加えて、特別講演として北海道博物館の鈴木琢也氏による「北海道出土の須恵器と古代物流交易」がおこなわれました。また、第10回企画展「北海道大学構内の遺跡から出土した須恵器」の説明会もあわせて実施されました。



▲ 特別講演の様子

■ ボランティア活動（報告）

平成29年度から、北海道大学埋蔵文化財調査センターが実施する様々な事業をサポートしていただくボランティア活動が始まりました。現在、8名の方々がボランティア活動員に登録されています。平成30年度は、月1回の定例活動の他に、遺跡トレイルウォークや調査成果報告会の運営にも御協力をいただきました。



▲ 第11回調査成果報告会での会場受付に御協力いただいたボランティア活動員の皆さん

編集後記

恵迪寮地点の刻書土器は、北海道大学の構内遺跡から発見された遺物のなかで最も「著名」なものといえるでしょう。数多くの論文でこの土器のことが取り上げられています。ようやく本ニュースレターでも特集を組むことができました（高倉）。

北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター 第32号
平成31（2019）年3月20日発行

発行：北海道大学埋蔵文化財調査センター

〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目

電話：011-706-2671 FAX：011-706-2094

e-mail：hokudaimaibun@gmail.com

URL：http://maibun.facility.hokudai.ac.jp/

印刷：柏楊印刷株式会社